



警告 のニュースレター「角笛」

発行日：2013年9月発行（第41号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

◎巻頭メッセージ「サルデスへの災い2」エレミヤ

◎証「偶像崇拜」E3

◎お知らせコーナー 「黙示録セミナー」

< 巻頭メッセージ >

「サルデスへの災い2」 by エレミヤ

本日は「サルデスへの災い2」として、このことを再度見ていきたいと思えます。

< サルデスとは赤いもの >

さて、繰り返して言いますが、サルデスということばの意味合いは、「赤いもの」という意味であることは正しく心にとめましょう。聖書は神の知恵により、書かれた書なので、一つ一つのことばには、神の与えた深い意味合いがあります。

プロテスタントを予表するという、サルデスに対して神が赤いもの、という名前を与えたなら、それは、偶然ではなく、このことばに神の与えた預言やら、この教会の未来に関するメッセージがある、と理解した方が正しいのです。

そして、そのサルデス、赤いものとは、旧約のエサウ、エドムと関係しており、それは、自分のものであった長子の特権を売り払った、俗悪なものの名前なのです。そして、そのことには、たとえの意味合い、預言的な意味合いがあり、サルデス、プロテスタントが自分のものであった、御国を継ぐ権利をいずれ、売り渡

すようになることへの預言なのです。

< エドムは、聖絶される民 >

さらに、赤いもの、すなわち、エドム(エサウの別名)は、イザヤ書の中で、何と、聖絶される民として預言されています。(イザヤ 34:5~15)

この聖書箇所から、現代のエドム、赤いものすなわち、サルデス、プロテスタントの未来に関して見ていきましょう。順に見ます。

“イザヤ34:5 天ではわたしの剣に血がしみ込んでいる。見よ。これがエドムの上に下り、わたしが聖絶すると定めた民の上に下るからだ。”

エドムに関して主は何と、「わたしが聖絶すると定めた民」であると語られています。聖絶とは、要は滅ぼされる、ということなのです。そのようなわけで、サルデス、すなわち、赤いものである、プロテスタントには、近未来の預言として、滅びが語られていることに、目をとめましょう。

「サルデスへの災い2」 by エレミヤ

“34:6 主の剣は血で満ち、脂肪で肥えている。子羊ややぎの血と、雄羊の腎臓の脂肪で肥えている。主がボツラでいけにえをほふり、エドムの地で大虐殺をされるからだ。

34:7 野牛は彼らとともに、雄牛は荒馬とともに倒れる。彼らの地には血がしみ込み、その土は脂肪で肥える。”

剣は、みことばや、教理に関するたとえです。“御霊の剣すなわち、神のことば”と書かれているからです。ですので、エドム、赤いもの、俗悪なクリスチャンは、主の剣、すなわち、みことばに関する災いにより、偽りの教理により倒れていくのです。具体的には、いったんクリスチャンになれば裁かれることはない、艱難の前に挙げられるなどの偽りの教理をつかみ、プロテスタントは、滅ぶようになるのでしょうか。

“34:8 それは主の復讐の日であり、シオンの訴えのために仇を返す年である。”

さて、エドム、すなわち、俗的になったプロテスタントが裁かれる、その理由は、「シオンの訴え、その仇」であることが書かれています。これは、どのような意味合いなのでしょう？

具体的には、こういうことでしょうか。すなわち、これから、プロテスタントは益々、俗的になり、ついには、シオンすなわち、正しくみことばに立つ人を迫害するようになります。同性愛も認めない、カトリックとの合同も認めない人は、「カルトクリスチャン」と呼ばれ、ついには、俗的なエドム的クリスチャンから、訴えられたり、死刑を宣告されるようになります。

「兄弟が兄弟を訴えて死に至らせる」とのことばが、プロテスタントの中で、実現するようになるのです。そして、その迫害の急先鋒が、エドム、すなわち、俗的、この世の倫理観で、兄弟を裁く、プロテスタントのクリスチャンなのです。

正しい人々はそのように迫害を受け、さらに殉教するでしょうが、しかし、主はそのことがらを見ごしにせず、「復讐」すると語り、「シオンの訴えのために仇を返す」と語ります。

“34:9 エドムの川はピッチに、その土は硫黄に変わり、その地は燃えるピッチになる。”

川は「わたしを信じる者は…**生ける水**の川が流れ出るようになる。」のことばのとおり、聖霊と関係があります。教会には本来、いのちの川、聖霊の川が流れているべきなのですが、エドムすなわち、赤いもの、終末の日のサルデスにおいては、「エドムの川はピッチに、その土は硫黄に変わり」ます。

ピッチも硫黄も、命の水とは程遠いものであり、とても飲めるものではありません。同じように、その日、俗悪な教会、エドム化したプロテスタントの教会においては、そこで働く霊は飲めるものでも受け入れられるものでもなく、逆に呪いの悪霊が教会の中で働くようになるのです。

このことは、今のプロテスタントにおいては、現在一部成就しており、ベニー・ヒン、ロドニー・ハワードなどの悪霊の器が集会で活躍しています。

34:10 それは夜も昼も消えず、いつまでもその煙は立ち上る。そこは代々にわたって、廃墟となり、だれも、もうそこを通る者はない。

34:11 ペリカンと針ねずみがそこをわがものとし、みみずくと鳥がそこに住む。主はその上に虚空の測りなわを張り、虚無のおもりを下げられる。”

みみずくや鳥は、霊的なことからのたとえであり、ここには、エドム、プロテスタントの教会が悪霊の住みか、となることが描かれています。結果、神に強いる魔術的な祈り、ヤベツの祈りなどが用いられるようになっていきます。

“34:15 蛇もそこに巣を作って卵を産み、それをかえして、自分の陰に集める。とびもそれぞれ自分の連れ合いとそこに集まる。”

蛇はエデンの園で、神のことばを疑わせ、エバをだました蛇に通じ、また、「蛇よまむしの末よ」と呼ばれた偽りの教師、律法学者に通じます。すなわち、ここでは、俗悪なエドムの教会は、偽り教理を語る教師の巣となることがたとえで語られているのです。

<幾人かの衣を汚さない人々>

さて、黙示録に戻り、引き続き、サルデスに関するみことばを見て行きましょう。

“黙示録 3:4 しかし、サルデスには、その衣を汚さなかった者が幾人かいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らはそれにふさわしい者だからである。”

ここでは、サルデスには、衣を汚さず、白い衣を着る人が数人いることが書かれています。汚れる、ということばは以下の箇所でも使われています。

“1コリ8:7 しかし、すべての人にこの知識があるのではありません。ある人たちは、今まで偶像になじんで来たため偶像にささげた肉として食べ、それで彼らのそのように弱い良心が汚れるのです。”

ですので、衣が汚れる、とはたとえであり、いわんとしていることは、良心が汚れる、罪がある、という意味合いであることがわかるのです。この幾人の人達以外のプロテスタントの人々、すなわち、大部分のプロテスタントの人々は、みな、白い衣を着ていない、汚れていることがわかります。さて、白い衣を着ていないとどんな問題があるのでしょうか？

以下の様に書かれています。

“ヘブル12:14 **すべての人**との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主を見ることはできません。”

すなわち、白い衣を着ず、聖くないなら、我々

は主に会うことができないのです。

<衣が白くないなら、永遠の命は難しい>

ですので、多くの人々の衣が汚れている、サルデスの教会の霊的な実態とは、罪に落ち込んでおり、その永遠の命が危ない教会である、ということです。以下のサルデスへのみことばは、ことごとく、サルデスにおいては、永遠の命が危ない状態であることを示すと、理解できます。

「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きてるとされているが、実は死んでいる。」
「目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちをカづけなさい。」
「わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。」
「それを堅く守り、また悔い改めなさい。」
(黙示録3:1-3)

ですので、プロテスタントすなわち、サルデスの教会は、自分たちの霊的現状に関して、根拠のない安心を持つべきではないと思われます。むしろ、神の言葉は、サルデスの永遠の命は危ない、と警告していることを理解すべきなのです。

もちろん、サルデスの全ての人の永遠の命が危ないわけではありません。「しかし、サルデスには、その衣を汚さなかった者が幾人かいる。」と書かれているからです。

さて、このことばの中の「幾人」ということばが少しひっかかります。そのことばの意味合いはどんなものなのでしょう？この件に関して、幾人と訳されたことばは、以下の「まれ」と訳されたことばと同じ原語です。

“マタイ7:14 **いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれ**です。”

ここでは、永遠の命に至る門は小さく、その道は狭く、それを見出す者は「まれ」である、すなわち非常に少ないことが強調されています。そして、まさにその「まれ」と訳されたことばが、サ

「サルデスへの災い2」by エレミヤ

ルデスの「幾人」と同じことばなのです。ですので、ここでもみことばが語っていることは、サルデスの大多数の人は、その衣が汚れており、義を獲得しておらず、彼らにとって、永遠の命は危ない、そのことが語られているのです。次のことばを見てみましょう。

“黙示録3:5 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表わす。”

ここでは、その「まれ」である白い衣、義の衣を着た「幾人」かの人に対して、「彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。」ことが約束されています。堅く約束されているのです。

ですので、これらのサルデスにおいては「まれ」な義人にとっては、いのちの書、すなわち、永遠の命は安泰です。「いのちの書から消すようなことは決してしない。」ことが約束されているからです。しかし、しかし、それなら、それ以外の大多数の人はいったいどうなってしまうのでしょうか？ どうも永遠の命が危なくなりそうなことが想像できるのです。いのちの書に関しては、以下の様に書かれています。

“黙示録20:15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。”

いのちの書は、永遠のいのちに通じます。ですので、いのちの書に名前を記載されている人は永遠の命を得るようになります。ですので、いのちの書に名前を記されることは、クリスチャンにとっては、必須です。

なぜなら、上記の箇所には、「いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた」と書いてあるからです。ですので、もし、万一私たちの名前がこの書に書かれていなかったら、もしくは、以前は書かれていたが、その後消されていたりしたら、我々は、みな、永遠の火の池に投げ込まれてしまうのです。

たとえ、私たちがどれほど、熱心に教会活動をしていようと、はたまた、牧師稼業をしていようとまいとです。繰り返しますが、聖書は、「いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた」と、非常に簡単な火の池に入る人と入らない人との区分を述べます。

そして、それは、いのちの書に名前があるかないかの単純な区分なのです。ですので、何はともあれ、理屈ぬきで、クリスチャンは、このいのちの書に名前が記載されることを最重要視して、それを追い求めるべきである、と私には思えます。

永遠の命を獲得するにはいのちの書に名前が記載されることが必須なのです。さて、このいのちの書に名前が記されることに関して、サルデスの教会に対して、よくよく考えると、主は恐るべきことを語っているように、思えます。

繰り返しますが、主は、これらのサルデスのほんの幾人かの、まれな義人に関しては、「わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。」と堅く約束しているのです。すなわち、それらのほんの幾人かの義人は確かに名前がいのちの書から消されないのですが、しかし、それ以外の大多数のサルデス、白い衣を着ていない人々に関してはどうなるのでしょうか？との疑問がわくのです。

想像できることは、彼らの名前がいのちの書から消されてしまうこと、そして、結果として、彼らが、火の池に投げ込まれることが予想できるのです。このことに関して、このような例を考えれば、わかりやすいでしょうか。

1クラス40人の生徒の中から、先生が学術優秀な学生5人ほどを呼び、このようにいっとしましょう。「実は、事情により、来年から、クラスの学生の数を急遽減らす必要があるんだ。しかし、君たちだけは、学校に留まれるし、学籍簿から名前は消されないよ。」

そんな風に名指しでいわれた学生は名前が消される心配がなく、万々歳ですが、しかし、そうでない、先生から約束されなかった大多数の生徒はどうなるのでしょうか？みな、名簿から名前が消されてしまう可能性があります。

このことは、サルデスへの主の約束も同じなのです。ほんの幾人かはいのちの書から名前を消されないことが約束されていますが、しかし、そのことばを裏返すとそれ以外の大部分のサルデスの名前がいのちの書から消されることが暗示されているのです。

そうです、そうなのです、多くのクリスチャンがいのちの書から名前を消される教会、それがサルデスであり、プロテスタントなのです。

ですので、私たちは、プロテスタントに伝わる、おかしな教理、すなわち、いったんクリスチャンになったら、決して裁きに会わない、などと聖書と異なる教理を盲信せず、虚心になってみことばの声に聞くことが大事です。

たとえ、クリスチャンであったとしても、洗礼を受けていたとしても、その歩みが罪にまみれており、衣を汚した歩みをするなら、その時にはいったん名前が記されたいのちの書から、その名前が消され、滅びに入る、すなわち、何と火の池の滅びに投げ込まれる、それがサルデスの教会に関して語られている、警告の主旨であり、論調なのです。

さて、ここでは、いのちの書から名前が消される、というあまり聞かない表現が書かれています。このことを考えてみましょう。実は、聖書の中では、いのちの書から、名前が消されるということが何度か書かれています。たとえば、以下です。

“詩篇69:28 彼らが**いのちの書**から消し去られ、正しい者と並べて、書きしるされることがありません

ように。”

“出32:32 今、もし、彼らの罪をお赦しくださるものなら——。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。”

“32:33 すると主はモーセに仰せられた。「わたしに罪を犯した者はだれであれ、わたしの書物から消し去ろう。”

ですので、いのちの書に書かれた名前とは、絶対的なものでも、決して消えないものでもありません。我々の歩み方しだいでは、あっさりと名前が消え得るのです。それが、聖書の主張なのです。我々がクリスチャンになった、その日、いのちの書に名前が記されたことは真実でしょうが、しかし、その後の歩みしだいで、名前が消えることもありえる、これが、聖書の主張なのです。

ですので、私たちは、これらのサルデスへ語られた厳しい警告に耳を傾け、必要があれば、悔い改め、主が語られた、正しい歩みに入りましょう。

終末における主のみこころを行いましょう。

—以上—



俗悪なエサウ

聖書には、至るところに「偶像」ということばが書かれています。モーセの十戒の一番はじめには、「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。あなたは自分のために、偶像を造ってはならない……それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない……」(申命記5章7～9節)と書かれています。また、「偶像」ということばに関連して、「偶像崇拜」「偶像礼拝」ということばも使われています。これらのことばは、私たちクリスチャンが素通りしがちなことばかも知れません。別に仏壇や釈迦や地蔵に手を合わせたり、拜んだりしていないんだから関係は無いと。でも、少し考えていただきたいのです。度々繰り返して申し上げていますように、聖書は基本的には唯一の神様を崇め、イエス・キリストを救い主として信じて受け入れているクリスチャンに向けて書かれている書物です。ですから、「偶像」とか「偶像礼拝」とか「偶像崇拜」ということばは、私たちクリスチャンと決して無縁ではないのです。私事で恐縮ではありますが、今年に入ってカトリックの信者さん向けの警告の奉仕をしていく中で、もしかすると自分をはじめ、多くのクリスチャンは「偶像」に関しての知識を聖書の視点からあまり認識していないのでは？と、そんな語りかけを主から受けましたので、御言葉に基づいて神様が語っている「偶像崇拜」について話をさせていただきたいと思えます。本日は、「器崇拜の罪」と「主の声に従わないことは偶像礼拝の罪」の2つのポイントから語っていききたいと思います。

①「器崇拜」の罪

世の中でも、「あの人は大きな器だ」なんてことを耳にしますが、私たちクリスチャンも「神様の器」にたとえられています。また、「神様の働き人」と、そんな意味合いがあります。たしかに神様の器として働きをすることは尊いことです。特に牧師や教師、すなわちメッセージの働きをしている人を通して、私たちの歩みは建て上げられていくからです。ゆえにそういう人に敬意を払ったり、助けの手を差し延べていったり、正しく働きができるようにとりなしをしたり、従っていくことには大きなポイントがあります。

ただし、それはそれとして、若干注意が必要です。いくら尊敬できる、あるいは偉大な器だからと言って、器を神様と同じ位置に置くのはNGなので

す。何を申し上げたいのか？と言うと、器は器であって、どこまでも人であって、神様ではないということです。たしかに神様には間違いや誤りは一切無いのですが、器の場合は神様と違って、時として間違えることがある、ということです。

もちろん器、すなわち牧師や教師が語っていることが御言葉と結びついているなら、なんら問題はありません。その教理をそのまま受け入れて従っていけば良いのです。でも、万が一、御言葉と牧師や教師の言うことがぶつかった場合、そんな時にはどうするのか？いくら権威に従うことが大事だと言っても、御言葉に相反する教えに関しては受け入れてはいけません。神様のことばよりも器の言うことに従うなら、方向がズレてしまうからです。そう、御言葉と器の言うことが違った場合に、神様のことばよりも器のことばを優先して従っていくこと、それがそのまま、「器崇拜」ということになってしまうのです。

一例を挙げるなら、聖書にははっきりと「地獄(火の池)」について書かれているのですが、カトリック教会のローマ法皇は、「地獄は無い」と言っているそうです。もし、吟味もせずその教えを受け入れるなら、御言葉をないがしろにする、つまり御言葉を投げ捨てる、もっと言うなら、神様を捨て去ることになるのです。また、プロテスタントの教理においてもしかりです。「セカンドチャンス」「艱難前携挙説」や「福音の総合理解」はその最たるものではないでしょうか？聖書には、3年半の艱難時代のこと、行いの無い信仰は神様に喜ばれないことについて書かれているのですが、これらの教えはダイレクトに御言葉を否定するものです。そういう教えを何の吟味も無く盲信していくときにそれもやはり、神様のことばよりも器の言うことを優先する、いわば「器崇拜」という風に神様の前には見なされてしまうのです。

ですから私たちが教えを受けるときに、その都度吟味していくことが大事だと思われれます。吟味して御言葉と矛盾が無いのであればそのまま受け入れればよし、しかしそうでないのなら、受け入れてはダメなのです。

場合によってはそのことに異を唱えたり指摘したりする必要もあります。それこそ聖書には、偶像や高き所を取り除くことについても書かれていますので、そのことに大いにポイントがあります。もちろんその際には、柔和&寛容な心で正すことが大切です。いくら正しいことではあっても、乱暴な口調や傲慢な思いで語るなら、耳を傾けてもらえないでしょうし、それよりも何よりも聖霊様に働いていただけないままになってしまいますので・・・せっかくの良い教えも台無しになってしまいますので、こういったことに関しても適切な配慮をしたり、気を付けていくように心がけていきたいと思えます。ではあっても、語るときには的確にハッキリと分かりやすく、なおかつ神様を見上げて大胆に語っていきたくと思えます。話は少しそれてしまいましたが、以上が「器崇拜」についての事柄です。次を見ます。

②「主の声に従わないことは偶像礼拝」の罪

まず、御言葉を見てみたいと思えます。

参照 I サムエル記15:23

15:23 まことに、そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ。あなたが主のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた。」

ここには意外なことが書かれています。なんと、「従わないこと」は、「偶像礼拝」につながると言うのです。びっくりではないでしょうか？従わない＝偶像礼拝だということです。こういう概念は多くのクリスチャンにはあまりないのでは？と思えますがいかがでしょうか？少なくとも以前の私は何を言っているのかよく分かりませんでした。これはどういうことを言われているのか？と言うと、当たっているかどうかは別として、私はこんな風に思えます。いくら信仰を持っている、いえ、それだけでなく礼拝にも毎週欠かさずに行って奉仕もしている、お祈りや聖書の読み込みも沢山している、しかしそうではあっても、主の声に聞き従わないなら、「偶像崇拜」を行っているという風に見なされてしまうのです。23節の御言葉の前の節には、このようなことが書かれています。

「主は主の御声に聞き従うほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。」

見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」と。このことばは、主のしもべサムエルがサウルに対して語ったことです。この時、サウルは、「**罪人アマレク人を聖絶せよ**」との主からの命令を受けていたにもかかわらず、そのことに従わなかったのです。それで、サムエルからこのように言われたのです。

そうなんです、たしかに信仰も奉仕も、学びや訓練や備えを行うことも大事ではあります。でも、それにもまさって主の声に従うことは、もっとも大事なことだということをこの箇所では語っているのではないかと思います。御言葉から正しくメッセージをしたり預言をしたり、時には奇蹟を行ったりすることはとても素晴らしいことだと思います。ではあっても、どこかの箇所にも書いているように、後の世において、「**わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け**」と主から言われてしまうクリスチャンがいるのです。その前には、「**あなたの名において悪霊を追い出し、あなたの名において沢山の奇蹟を行ったではありませんか**」と書かれているように、要は御霊の賜物を用いて神様の働きをしたクリスチャンであっても、不法を行ってしまうとき、すなわち御言葉に従わないときに、主から退けられてしまうということを言われているのです。

ですので、私たちはいつも神様の声に聞き従っているか？についても、よくよく内側を聖霊にあって点検していく必要があるのでは？と思えます。神様の働きをしながらも、しかし、御声に背いてしまっただけで偶像礼拝と見なされてしまっただけで、最悪滅んでしまうことがないようにくれぐれも気を付けていきたいと思えます。個々の人において色々な思いや考え、あるいは都合もあるかもしれませんが、でも、神様がその時々と言われていることをいつでも優先して従っていきたくと思えます。

以上の点について神様から大事な語りかけを受けたように思いましたので、証をさせていただきました。最後に御言葉を読んで終わりにしたいと思います。

エレミヤ書7:22,23

7:22 わたしは、あなたがたの先祖をエジプトの国から連れ出したとき、全焼のいけにえや、ほかのいけにえについては何も語らず、命じもしなかった。

7:23 ただ、次のことを彼らに命じて言った。『わたしの声に聞き従え。そうすれば、わたしは、あなたがたの神となり、あなたがたは、わたしの民となる。

る。あなたがたをしあわせにするために、わたしが命じるすべての道を歩め。』

いつも私たちの永遠の命のために大切なことを語ってくださる主の御名をほめたたえ、感謝します。

—以上—

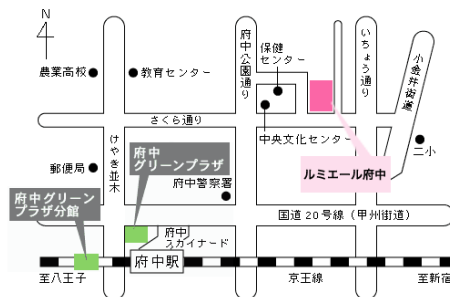
<お知らせコーナー>

- レムナントキリスト教会日曜礼拝：

午前:10:30-12:30, 午後 14:00-16:00

場所：東京、京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館(tel 042-360-3311)

場所の url: http://www.fuchu-cpf.or.jp/green/access/map_02.html



- 「エレミヤの部屋」終末預言解釈 HP (「エレミヤの部屋」で検索下さい)

黙示録、ダニエル書等、あらゆる終末預言に関する解釈を掲載しています。

- 「角笛」終末の警告 HP (「角笛」で検索下さい)

アメリカキリスト教会の背教の実態、悪霊のリバイバルなど、多数の終末関連の翻訳記事あり。

- 第31回黙示録セミナーby エレミヤ

黙示録、ダニエル書等終末に関するトピックを解説するセミナー。

北海道から、広島から熱心なクリスチャンが参加しています。

場所:府中グリーンプラザ本館講習室(7F) 場所は上記。

日時: 2013年11月10日(日)PM6:00-8:30

費用:入場無料、ただしテキスト代1000円(当日徴収)

定員:20名(先着申し込み順。満員しだい締め切り)

主催:レムナントキリスト教会(tel 042-306-5002)

申し込み:メールもしくはfaxで「名前、住所」記載の上、セミナー参加希望と申し込みください。

Fax 020-4623-5255 e-mail: truth216@nifty.com